

ピーター・R・ウーレンバーグ稿「コーホート・
ライフサイクルの研究：1830～1920年マサチュー
セッツ生まれの女子コーホート」

Peter R. Uhlenberg, "A Study of Cohort Life Cycles:
Cohorts of Native Born Massachusetts Women, 1830-
1920" *Population Studies*, Vol. XXIII, No. 3, Nov. 1969,
pp. 407-420.

人口学的データに基づいて家族周期のモデルを作成し、それによって生計費の変動その他家族周期の進行にともなう家族生活の諸条件の変化を統計的に検討しようとする研究は、わが国でも近時ようやく盛んになりつつあるように見受けられる。その場合採用される家族周期モデルの多くは、夫婦の結婚年齢、子供の出生間隔、子供の結婚年齢、夫妻の死亡年齢など、モデル構築の材料とされる人口学的データとして、集団の平均値またはその他の統計的代表値が用いられることが一般である。現代の文明諸国の低い死亡率のもとでは、子供を生み上げるまで、そしてそれ以後もかなり長く夫婦が生存する確率はすこぶる大きい。しかし、それでもなかには夫妻のいずれかが再生産期間の途中で死亡したり、無子のまま過したりするケースはもちろんありうる。

ここに取り上げたウーレンバーグ(米国ノースキャロライナ大学社会学部講師)の論文は、家族のライフ・サイクルではなくて個人(女子)のライフ・サイクルを、またモデルの作成でなくて、実際の出生コーホートの経験したライフ・サイクルを研究の対象としたものであるが、ライフ・サイクルの型を人口学的条件のちがいでによって、いくつかの種類に分けて観察しようとしたところに特徴があり、この着眼は家族周期モデルの研究にとっても参考になる点があると考えられる。

著者はライフ・サイクルを次の6型に分類している。(1)20歳未満で死亡する型、(2)20年以上生きるが未婚のまま一生を終る型、(3)20年以上生き結婚するが子供を生まない型、(4)20年以上生き結婚し子供を生むが、55歳未満で死亡する型、(5)結婚し子供を生み55年以上生きるが、55歳未満で未亡人となる型、(6)典型的なライフ・サイクル——結婚し子供を生み55歳以上まで夫と死別しない型。なお、上記で55歳という年齢は末子が親元をはなれるか結婚する大体の平均的な年齢として採用したと記している。

研究の対象集団は、1825～1925年にマサチューセッツ州に生まれた女子で、そのコーホートの必要な人口学的データは、1885年および95年の同州センサス、1890～1960年の合衆国センサス、マ州人口動態報告、1840～1900年マ州コーホート生命表(Paul Jacobson, 1964年による)を出所としている。

さて、出生年次10年区分で出生コーホートを区分しているが、各コーホート出生数を1,000と置いた場合の前記各タイプに該当する者の数を、いくつか選んだコーホートについて示すと表のごとくである。タイプ

タイプ	1825—34	1845—54	1865—74	1885—94	1915—24
(1)	356	314	309	263	108
(2)	129	142	178	178	106
(3)	95	100	114	122	90
(4)	119	117	87	78	40
(5)	91	98	86	85	85
(6)	209	230	226	274	571
計	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000

(1)、(4)、(5)および(6)は大体において、若いコーホートほど構成比が減少または増大しており、これはあきらかに死亡率の時代的低下が主原因をなし、タイプ(2)と(3)とは中間のコーホートで構成比が増大しており、これは結婚パターンの時代的变化に起因するところが大きいことを指摘している。

著者のこの研究は、このようにして女子のライフ・サイクルの型のコーホートの時代的推移を分析し、さらにその人口学的および社会経済的因果の考察におよんでいる。人口現象の暦年的変化の解明にとってコーホート的变化の認識が今日ますます重要視されている折から、この種の研究は貴重である。しかし、この両者の変化の関連への注目がこの論文ではいささか手薄になっているのが惜しい。(小林 和正)